

2017年12月24日 日曜礼拝メッセージ

聖書:マタイ2章1-12節 題:「メシヤを求める人々」

序 論

- 「クリスマス」とは何か？ 日本では、昔、トニー谷というお笑いタレントがいて、「クリスマス」は「苦し、クルシミマス、苦しみます」ですと言った。
- プリンストンの日本語教会の2代目の牧師となってくださった栗栖信之先生は、よく苗字の栗栖を英語のFirst NameのChrisと間違えられますが、本当か嘘(冗談)か忘れたのですが、彼の親戚の御婆さんに「マス」さんと言う方がいたとか。となると、この方は、「クリス・マス」さんと言うことになる。
- 今は、クリスマスは、サンタクロースの誕生日だと思っている人もいる。
- しかし、クリスマスの本当の意味・中心は、キリスト・マスで、キリストを礼拝することである。
- 即ち、キリストが中心である。キリストにフォーカスし、キリストを求めることである。
- 人々は、活動、儀式が好きです。でも、それが何のためかを見失うなら意味のないものになる。
- 私たちの今年のクリスマスはどうだったか？ キリストを求めたクリスマスであったか？ もう一步突っ込んで、私たちの人生はキリストを求めている人生か？
- 問題は、キリストに何かを求める人生か？ あるいは、キリストご自身を求める人生かである。
- 今日の聖書箇所は、クリスマスに起こった出来事としては、「東方からの博士たちの礼拝」として有名な箇所である。
- 私たちは、その中に、「メシヤを求めた人々」、即ち、博士たちと、「メシヤを求めていなかった人々」として、ヘロデ王、宗教家たち、民衆たちの姿を見るのである。
- それは、正に、ヨハネもその福音書の冒頭で言っている。ヨハネ1章11節「この方は、ご自分の国に来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」と。

本 論

Ⅰ. まず、最初に、「メシヤを求めていない」人々の姿を学びたい。

A. その筆頭は、「ヘロデ王」である。

1. 「ヘロデ」と呼ばれる王は、聖書に何人が登場するが、このヘロデは、「ヘロデ大王」と呼ばれ、政治家としては、有能な人物であった。
 - (1)しかし、非常に猜疑心の強い人物で、自分の王としての地位を脅かしたり、王位を狙っていると思う人物は、たとえそれが自分の息子であっても、ことごとく暗殺した。
 - (2)ギリシャ語で、息子はヒュイオスと言い、豚はヒュスである。人々は、それをひっかけて、「ヘロデの息子(ヒュイオス)であるより、彼の豚(ヒュス)である方が安全である」と言ったと言う。
2. このヘロデが、ある日、突然、「東方」から来た「博士たち」の訪問を受けた。
 - (1)「東方」とは、チグリス、ユーフラテス川の流域、ペルシャ、バビロン地域であり、今のイラン、イラク地域である。
 - (2)「博士たち」(マゴイ)とは、今で言う天文の研究者に当たると共に、その知識から、当時、上記の地方では、王に政治的な進言を与える立場・役職にあった人々であった。
 - (3)彼らの訪問は、ヘロデ王を大いに動揺させた。それが3節に記されている。
 - しかし、更に、彼らがヘロデ王に言ったことが、その動揺を増大させた。彼らは言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか？」と。
 - 彼の動揺の理由は何か？それは、そのニュースが、ユダヤ人の王としての彼の地位を脅かすものだったからである。
3. しかし、ヘロデ王は、同時に、その生まれたお方が、単なる政治的な王ではなく、ユダヤ人たちが待望する「メシヤ」であることを知っていた。
 - (1)それが証拠に、彼自身、4節に見るように、そのお方のことを「キリスト、即ち、メシヤ」と呼んでいる。彼は、メシヤ誕生、メシヤ到来を知っていたのである。
 - (2)しかも、その後続く記事によっても明らかのように、その誕生の場所までも、祭司長たち、聖書学者たちによって、ハッキリと知らされていたのである。
4. ヘロデ王は、このようにメシヤの誕生・到来を知らされた。しかも、その誕生の場所までもである。

しかし、それに対する彼の態度は、

- (1) 8節にあるように、表面的には、メシヤを受け入れているように見せかけながら、
- (2) 13、16節にあるように、実際には、メシヤを求めないどころか、自分の利益を阻む者として、拒絶し、殺し、無きものとしようとした。

5. なぜヘロデ王は、メシヤを拒んだのか？

- (1) それは、メシヤが、自分が人生で目指すもの、即ち、王位を手に入れ、それを維持することに邪魔な存在だったからである。
- (2) 今日と同じことが起きている。メシヤであるイエス様に従うことが、自分のしたいこと、人生で目指していること、野心を果たすことに邪魔だから、イエス様を求めようとしないのである。

B. 次に、祭司長たち、聖書学者たちに見るメシヤを求めない態度である。4-6節参照

1. 彼らは、一言で言うなら、「宗教家」であった。その彼らが、メシヤを求めない人々の中に数えられるとは、何と言う皮肉か！
2. 彼らはユダヤ人宗教家として、メシヤを待望するユダヤ人の先頭に立つべき人たちであった。それゆえ、メシヤの誕生、到来のニュースは、彼らにとって、重大問題であった。
3. 彼らは、また、聖書を熟知していた。それゆえ、王様に、「メシヤはどこで生まれるのか」と聞かれたとき、即座に、正確に、「それは、ベツレヘム」ですと答えることができた。
4. しかし、ここで、博士たちからメシヤ誕生のニュースを聞いたとき、彼らの反応は、何であったか？

(1) まず、そもそもどうあるべきであったかを考えたい。

- そのニュースに、遂に来られたか！と大喜びし、興奮する。
- 私たちも、博士たちと一緒に、ぜひ礼拝に行きたいと、申し出る。
- 博士たちと同じように、贈り物、捧げものを持って行きたい。
- 王にも、民衆にもこの喜びを伝え、メシヤを迎える準備をさせる。

(2) しかし、彼らは、これらのどれ一つとして実行しなかった。

- 彼らがしたことは、喜びは勿論、興奮さえない、実に淡々とした態度で、メシヤの誕生の場所をベツレヘムであると伝えただけであった。
- そして、それ以上、何もしようとしなかったのである。本当にそうなのかと探求したり、調査しよともしなかったのである。
- 即ち、彼らは、宗教家でありながら、メシヤを全く求めようとしていないのである。

5. なぜ、彼らは、メシヤを求めなかったのか？

(1) 彼らが求めていたのは、宗教であって、神ご自身でも、メシヤご自身ではなかったからである。

- 彼らは、宗教的儀式を行うこと、宗教的知識、聖書の知識を持つことで満足していた。
- 彼らは、宗教団体、ユダヤ教、キリスト教と言う団体とグループに属することで満足していた。
- そのグループのリーダーであることで満足していた。

(2) 彼らが、メシヤを追い求めたなら、その満足を失うことを知っていた。

- もし、メシヤを追い求めたら、王を怒らせることを知っていた。
- それは、自分の立場を危うくし、それらの満足を失うことになることを知っていた。
- 言い換えるなら、彼らにとって、メシヤを追い求めることより、自分の地位と立場を守ることの方が大切であったのである。

6. 今日の私たちはどうであろうか？

(1) 宗教はやっている。このときの宗教家たちのように、祈りもする、聖書も読み、知っている。宗教行事にも参加している。リーダー的存在でさえあるかもしれない。

(2) しかし、それは、ここで言われている宗教家たちのように、自分の立場が安全に守られている限りのことではないか？

(3) ひとたび、それが脅かされた時は、メシヤを追い求めることを放棄し、傍観者となるのではないか？

C. もうひとつ、メシヤを求めない人々のモデルを考えたい。それは、「一般民衆」である。3節

1. 3節の「エルサレム中の人も王と同様であった」と言う言葉から、そのことが分かる。

(1) なぜか？ メシヤの到来は、彼らが長く待望して来たことではないのか？

(2)それなのに、彼らが、これを歓迎できなかった理由は？

- 今までも、こんな話が一杯あり、偽メシヤで振り回されて来た。
- それにも増して、このような話があるたびに、ひと悶着があり、一混乱があり、内乱も起こりかねない。
- そんなくらいなら、メシヤは要らない。彼らには、メシヤより、目の前の安寧、安全、平和、経済的安定の方が大事であったのである。

2. 現代の、私たちにも、同じ誘惑と罠があるのではないか？

- *このように、王も、祭司長も、民衆も、みな求めている者は、自分であり、神ではない。メシヤでもない。
- *聖書が言っている通りである。「神を求める者はない。一人もいない」。
- *それが罪である。罪とは、嘘でも、口汚い言葉でも、盗みでも、人殺しでもない。それは、心の王座から神を追い出し、自分をそこに着かせる心の姿である。

II. それでは、第二ポイントとして、メシヤを求めた「博士たち」の姿から学ぶ

A. まず消極面から学びたい。それは、彼らにとって、メシヤを求めることが、如何に困難なことであったかである。

1. 彼らは、そもそも外国人であった。文化的、宗教的障壁と言える。
 - (1)日本人(特に、日本にいる)に伝道していて、よく言われることは、キリスト教は西欧諸国の宗教、即ち、日本人にとって、キリスト教は、外国の宗教であるという言葉である。
 - (2)それは、間違っている。なぜなら、キリスト教の発祥地は西南アジアであるからである。
 - (3)しかし、同時に、そのように言いたい気持ちは分かる。この博士たちにも同じことが言えるのではないか？ 彼らにとってユダヤ教の言う「メシヤ」は外国のものと同片付けることもできた。
2. 彼らには、その他の、物理的、肉体的、経済的、社会的、等々、沢山の大きな障壁があった。
 - (1)物理的、地理的に遠すぎる。2000キロ以上、何カ月もの旅を要する距離であった。
 - (2)その旅程は、「砂漠」と言う危険極まりの無い環境の中のものである。
 - 朝晩の寒暖の違いの激しさ
 - 水不足、食糧の不自由さ
 - 野獣の危険、旅人を狙う盗賊の危険
 - (3)キャリアと地位を危険に晒す：恐らく半年以上、本国での職を空ける危険(相当な社会的地位を持った人々と思える)
3. 彼らは、それらのすべてを危険に晒し、犠牲にする覚悟をもって、メシヤとの会見を求めて来たのである。
4. 更には、幾度とない、期待外れを乗り越えてであった。
 - (1)ユダヤ人の王としてのメシヤは、首都エルサレムの宮殿で生まれたとばかり思っていた彼らの期待は裏切られた。そこには、祝賀会も、式典も、喜びも、興奮も、何もなかった。
 - (2)当時片田舎であったベツレヘムに更に旅を進めなければならなかった。しかも、そこで導かれたのは、みすぼらしい一軒家に居候していた貧しい若夫婦に抱かれるイエスだけであった。
 - (3)しかし、聖書を見ると、彼らは、少しも失望したり、期待外れでガッカリした様子はなかった。
5. いずれにせよ、彼らは、これらの負、マイナスの条件と状況にもかかわらず、それを言い訳にせず、メシヤを求めたのである。

B. 次に、積極面から、この博士たちのメシヤを求める姿を見たい。

1. それは、何よりも、彼らの携えて来た贈り物、捧げものに表されている。
2. 彼らの携えて来た物は、言うまでもなく、黄金、没薬、乳香であったと聖書は告げる。
3. それらは、みな高価なものであった。
 - (1)それらの正確な価値評価は難しいかもしれないが、多くの聖書学者や、聖書講解者が認めていることは、それらがいずれも、財宝的尊さを持つ、高価なものであったことである。
 - (2)それゆえ、ある人は言う。彼らは、小国の王にも匹敵するような相当な高位にあった人物、富裕階級に属する人々であったであろうと。
 - (3)それにつけても、相当な犠牲を覚悟しての高価な贈り物であった。
 - (4)私たちにとって神様への最高の贈り物とは何か？
 - ある時、神様への愛と献身、感謝、信仰は、ここの場合のようい、「金銭」の捧げもので表さ

れるでしょう。

- ある時は、神様のために使う時間や奉仕によって表されるでしょう。
- しかし、最も高価な捧げものは、私たち自身である。ローマ 12 章 1 節を見たい。
- 大切なことは、それがどんな形であれ、捧げものが、自分の全部を心から神様に捧げることの象徴であることである。
- そして、聖書はこれを「礼拝」と呼ぶと言う。

III. 「博士たち」は、なぜそこまでできたのか？ 彼らは、メシヤの中に何を求めていたのか？

A. 彼らは、ユダヤ人の王としてお生まれになったお方はどこにおいでになりますかと尋ねた。

1. 有名な聖書講解者、ウィリアム・バークレーは、当時のクリスチャンでないローマの歴史家、タキトゥスを引用して、イエス様の誕生当時、ローマ帝国一帯の人々に、ユダヤ人の中から、全世界を包括する帝国を築く支配者が現れると言う固い信仰があったと記す。
2. それは、恐らく、ユダヤ人たちがバビロン、ペルシャ帝国時代に、それらの国々に捕虜として捕囚されていた時代に伝わった信仰であり、それがローマ帝国全体にも広がったのである。
3. この時、博士たちは、その信仰、即ち、世界の王として生まれたお方の誕生を祝い、礼拝するために来たのである。
4. そして、ここで大切なことは、彼らが、そのお方を単に地上的な偉大な王、自国を含めた諸国を敵として、征服して頂点に立つ王としては見ていなかったことである。
 - (1)もし、そのように思って、この国に来たのなら、そこに留まったはずであり、何のためらいもなく、母国には帰らなかったであろう。
 - (2)それだけでなく、そもそも、そのような祖国への裏切り行為をするために、華々しい贈り物を携え、行列を組んで祖国を出ることもしなかった、できなかったであろう。
 - (3)彼らが求めていたのは、地上の種族、部族、国籍、文化、宗教、政治を越えて、私たちに治める、全世界の造り主としてのメシヤ。
 - (4)それは、また、私たちの造り主として、私たち個人の人生、個人の心にまで及ぶ導き手、牧者であるメシヤ。彼らは、そのようなメシヤを求めていたのである。

B. 即ち、彼らは、ユダヤ人の王としてお生まれになったお方を、各国に立てられた地上の王を超えた神的な存在として、そのようなお方が必要と信じて、求めていたのである。

1. だからこそ、エルサレムの宮殿の中に、その子が生まれていなかったと知っても、それが、ナザレのド田舎の貧しい大工の息子に過ぎないと分かっても、即ち、その子は、人間的には：
 - (1)社会的にも、(2)政治的にも、(3)武力的にも、(4)教育的にも、何の力のない家の者と分かっても、少しも動揺したり、失望したりしなかった。
2. そして、それゆえ、彼らは、人間的には、みすばらしい男の子をみても、何のためらいもなく、持ってきた高価な贈り物を惜しげもなく捧げ、かつ、ひれ伏して拝んだ、礼拝したのである。
3. 神様は、このような礼拝者を求めておられる。
4. 私たちの礼拝は、余りに、見えるところ、物質的なものに左右されていないか？の時。

結 論

- 「求める人」と「求めない人」がいます。あなたはどちらですか？
- 「求める」ことこそが祝福の鍵だと聖書は言う。「求めなさい。そうすれば与えられます(マタイ 7:7)」と。
- しかし、大切なことは、あなたは、イエス様に何か自分の欲しい物を求める人ですか？ それとも、イエス様ご自身を求める人ですか？
- 多くの人は、前者である。だから聖書は嘆いて言う。「神を求める人はいない」(ローマ 3 章 11 節)と(神に求める人は多いが)。(まるで夫の持ってくる給料は求めるが、夫自身は??と言うように)
- 神様は、私たちが、ただ待っていて、「棚から牡丹餅」式に祝福を得るとは言っておられない。むしろ、熱心に神様を求めることを期待しておられる。それが正に、この博士たちがしたことである。
- 最後に聖書を読みたい。エレミヤ 29 章 13 節「もし、あなたがたが、心を尽くして、私を探し求めるなら、私を見つけるだろう」。アモス 5 章 4 節「私を求めて、生きよ Seek me, and live」。